

第二期 第六十一号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトップ

2021. 08. 20 定有堂書店 発行

読書思考圏域

汽水のほとりから (5)

夢よもういちど症候群

「男の子らしさ」「女の子らしさ」

そして「自分らしさ」

遠くに行きたい日記

「深い学び」をめぐって VII

わかちあいの声を感じるとは？

八代日記 (十七)

架空目録の愉悦

鳥取あれこれ その六十

最期から二番めの…

コラボ掌編小説

プールとかちわり

我ハ石ココ

編集後記



奈良 敏行

小原 修治

萩原 俊郎

三浦 永理

鳥居 貴彦

松田 裕史

芝野 浩貴

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

あきの素生

ドラマリア

読書思考圏域

奈良 敏行

(定有堂 店主)

七月のはじめは、県内に大雨被害が多かった。本屋に訪れる人も少なく、閑散とした日がつづいた。その後、梅雨明けの強い日差しが、やってきた。人も戻り始めた。ある日、一人で三万円以上も、本を買う人がいた。驚いた。本に挿入している私製のスリップを見ると、店内をどう動いたかが見えてくる。奥溜りの人文書に、関心があったようだ。レヴィーストロースの『野生の思考』などの人文書が、購入の中心だった。若い人で、知識欲の旺盛な人、だと推察できた。

その中に、「定有堂の推し本」のカードがついている本が、いくつもあった。伊藤亜紗編『「利他」とは何か』、山内志朗『目的なき人生を生きる』もありうれしかった。見ている世界、感じている世界が、定有堂と重なるようので、親密感を抱いた。小冊子の『音信不通』も、持ち帰って読んでいた。いつそう一体感を感じた。声をかけたかったが、気後れした。それで手持ちのデニム地のトートバックをプレゼントし、本を詰めて手渡した。せめてもの好意をしめ

したかった。

アレントの『人間の条件』もあった。これは、人文セレクトコーナーの核と思える本だ。棚には横書きで「小さな道しるべと自己肯定」と記してある。矢田部英正『日本人の座り方』もあった。これは少し離れて、BABジャパンを中心とした身体論・武術論のコーナーに、埋もれていた本だ。奥本大三郎『ランボーはなぜ詩を棄てたのか』もあった。入り口近くの新書新刊コーナーに、さりげなく差してあった本だ。ランボオが好きなので、あえて目立たないように、隠していたつもりだった。

三万円以上買っているのに、それ以上言えなかったが、レジ前方に面陳している『対訳ランボー詩集』岩波文庫もすすめたかった。仏語対照がめずらしい。『目的なき人生を生きる』は、版元品切れがつづいていて、希少だともいいたかった。新刊コーナーには『無駄な死など、どこにもない』ぶねうま舎や、『自分探しの倫理学』トランスビューも、案内したかったが果たせなかった。

「推し本」カードだが、『目的なき人生…』には、「ここは蒼ざめた倫理学／幸福な死に方をしなければ、幸福な生き方をしたことはないのか?」。『「利他」とは何か?』には、「純粹利他の大原則＝自分の行為の結果に見返りを期待しないこと。あたり前ですが…」と記して

いる。

そういえば数日前、綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』を購入し、カードも持ち帰りたいという女性がいて、うれしかった。そこには、「身体内部の情報を細かく大量に拾いすぎて、外の世界と『つながり』にくくなった人へ」と書いている。

山内志朗さんは『自分探し…』の巻末を、「自分とはハビトウスの上で咲く〈花〉なのである」と結んでいる。そういうえば、「花が存在する」「存在が花する」といった碩学もいたが、同様のわかりにくさの同一線上にあり、愛読者にはよくわかる理路なのだ。冒頭では「言葉や論理を控(くじ)くところのほか、真実は現れない」と断言し、しびれてしまった。いま一番気になる人だ。

六月の定有堂教室「読む会」のテキストは、『人新世の「資本論」だった。著者の斎藤幸平さんは、『未来への大分岐』の中で「Think Big」と、立場を示している。環境危機を踏まえた、ポストキャピタリズムとしてのコミュニティの視野だ。四月にはブレイディみかこ『労働者階級の反乱』を購読した。この「Think Big」と「地べた」の両極を視野に入れるのが、定有堂での読書思考圏域だ。いろんな議論があったがいつも結論はでない。わたしは、「先の約束」には、懐疑的なところがある。やってみないと

善し悪しはわからないが、「いま」の危機意識をバネにする、短い判断を信頼したい。

第三項として、いま山内志朗に興味を持っている。スコラ哲学者なのだが、天使主義を批判している、それは「規範性や道徳性を尊厳としてのみ見る者」だと。天使は肉をもたないから「地べた」を知らない。山内志朗のキーワードは「コナトウス」「ハビトウス」「このもの性」だが、わたしにはまだ理解が及ばない。でもこの方向に圏域を広げてみたいと考えている。スコトウスの『形而上学問題集』に「石の本性はそれ自体で個体なのか、それともある外的なものによって個体であるのか」と述べてある。その理路に重ねて山内志朗は、「個体の中に独立して宿っているものというよりも、世界という場面の中に輝くもの」と、「このもの性」を説明している。

「このもの性」を中心に最近考えているが、先日ある人に「定有」を旗印にしているのですから当然ですよね、と示唆され驚いた。数十年を経て同じ場所に立ち戻っていたのかと理解した。

2021.07.18

(参考)

レヴィ・ストロース『野生の思考』 みすず書房 1976

伊藤亜紗・中島岳志・若松英輔 『「利他」とは何か』 集英社

新書 2021

山内志朗 『目的なき人生を生きる』 角川新書 2018

ハンナ・アーレント 『人間の条件』 ちくま学芸文庫 1994

矢田部英正 『日本人の坐り方』 集英社新書 2011

奥本大三郎 『ランボーはなぜ詩を棄てたのか』 集英社新書

アルテュール・ランボー 中地義和 『対訳ランボー詩集』 岩波

文庫 2020

山内志朗 『無駄な死など、どこにもない』 未来哲学研究所 2021

山内志朗 『自分探しの倫理学』 トランスビュー 2021

綾屋紗月・熊谷晋一郎 『つながりの作法』 NHK新書 2010

マルクス・ガブリエル マイケル・ハート ポール・メイソン

斎藤幸平・編 『未来への大分岐』 集英社新書 2019

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室(会場 定有堂二階 葉香クラブ(荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

汽水のほとりから (5)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

70年代末から90年代末までの約二十年間にわたって刊行された『スペース』という鳥取市のタウン誌があった。二年前、定有堂店内にあった在庫を購入させていただいたが、そのきっかけは「知のカフェ」という市民講座だった。テーマは「本の底力」。自宅の近くで汽水空港という本屋を始めたモリテツヤ君がゲストに呼ばれ、その応援がてら参加したが、次回のゲストが定有堂の奈良さんだと聞き、こちらにも続けて参加した。その際会場に展示されていたのが『スペース』で、その編集に携わっておられた方々が現在「知のカフェ」を主宰されていることも初めて知った。奈良さんはこの時、定有堂の約40年の歴史を振り返り、店頭売り上げなどから肌身で感じられた、人が本を読むことの意義とその歴史の変遷について、①エビデンスからエモーションへ（読書の現在）②エンパシー（本の効用）③文庫の森羅万象く初発衝動という「力」（フォース）、

の三点に絞って説明された。中でも私が気になったのが②で、奈良さんはこれについて次のようなことを言われた。

「エンパシーとは、ブレイデイみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）で話題になった言葉で、本では自分のサイズではない靴を履いてみることに喩えられています。これに関連して、本日配布した資料に彼女が書いた記事（朝日新聞2019・8・31本の常備薬⑤）を付けましたが、彼女は「頭の栓が抜ける」ような言葉との出会いが、日常から「自分を解放する」と述べています」。

が、聴いていた私は、エンパシーと「自分を解放すること」の関連性がよく分からなかった。新聞記事の方にはエンパシーの語は使われていなかったし、どう繋がるのか疑問だった。ところが先月出たブレイデイみかこの新刊『他者の靴を履くアナーキック・エンパシーのすすめ』（文藝春秋）を読むに及んで、この疑問が一気に氷解した。

この本は前半でエンパシーを、「他者の靴を履く」即ち他者の視点に立つて他者を理解する能力だと定義する。が、後半では、これを全く別の視点から捉え直している。殊に『The Dark Side of Empathy』（Fritz Breithaupt 2019）という本を取り上げ、エンパシーはそれが向けられる対象ではなく、その能力を使う本人にとって良い物だとする説を紹介し、①我々が複数の世界に住むことを可能にする②

別の視点を開くことで経験を複合的なものにすることを可能にする③瞬間の未来や過去を想像し、その出来事のオルタナティブなバージョンを考えることを可能にする、等の効用を説く。エンパシーは他者理解よりも自己理解にこそ有益で、利他的と見えても利己的だというのである。

著者は右の説明の後、「自分のためのエンパシーと聞く」と、思い出すのはやはり金子文子だ」とし、この大正時代のアナキスト、恩赦を拒んで獄死した自由人である彼女の自伝『何が私をこうさせたか』の一節を引用する。それは十三歳の文子が投身自殺を図る間際、油蟬の声で我に返る場面だ。(自殺すれば)「祖母や叔母の無情や冷酷からは脱(のが)れられる。けれど、けれど、世にはまだ愛すべきものが無数にある。美しいものが無数にある。私の住む世界も祖母や叔母の家ばかりとは限らない。世界は広い」。

著者はこれをこう説明する。「彼女が聞いた油蟬の鳴き声が、他者の視点を注入する役割を果たしたとは言えないだろうか」。彼女は油蟬(周囲の自然)の視点を取り込み、これと同化するエンパシーの能力によって、自己の存在を虚にして閉塞の外へと解放し、自殺を免れたというのだ。実はこの一節は「自分を解放する」体験の具体例として、「知のカフェ」の配布資料の新聞記事にも引かれていた。それを読んで以来疑問だった、「自己を解放する」ことと

エンパシーとの繋がりがここにおいて氷解したのである。なお、『The Dark Side of Empathy』は、書名から分かるようにエンパシーの負の側面に光を当てた本で、ここではエンパシーの優れている人は他者に同化しやすい傾向があり、自己喪失の危険に陥り易いことが論じられている。ブレイディみかこはこれを「エンパシーの闇落ち」と呼び、個人の自由を徹底するアナキズムと繋いで回避すべきだと論じている。しかし、彼女が直感的に主張したように、エンパシーとアナキズムにはもともと繋がる要素がある。

思うに、エンパシーの他者理解の側面はクロポトキンに代表される相互扶助的アナキズムと繋がっており、一方、自己理解の側面はシュテイルナーに代表される個人主義的アナキズムと繋がっている。このことは、エンパシーにおいて、相互扶助的であることと個人主義的であること、言い換えれば、利他的であることと利己的であることとが両立し得る可能性を示唆する。それはまた、エンパシーが斎藤幸平や内田樹らによって昨今叫ばれている「コモンの再生」に資する能力であることをも示唆するように思う。

夢よもついちど症候群

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「大阪オリンピック」が夢と消えた2001年7月、私はたまたま大阪で勤務していた。梅田や御堂筋の繁華街には「2008年に大阪五輪招致を」というポスターがベタベタ貼ってあったが、大阪市民は残念がる風でもなく、ケロッとした顔で、いつも通りたこ焼きを食べていた。

それもそうだろう。大阪はそれどころでなかったのである。大阪府は関空対岸の「りんくうタウン」、大阪市は夢洲・咲洲・舞洲の臨海新都心という、ともにバブル全盛期に立てた開発計画が仇になり、兆単位の借金を抱えて財政破綻寸前。街にはホームレスがあふれていた。

大阪オリンピックは、バブル時代の夢の跡、人工島・舞洲を主会場に起死回生を狙うものだったが、招致理由は「世界からぎょうさん人が来たら、大阪が有名になって元気になるまつせ」程度で、それが大阪の再生にどうつながるのか、道筋はさっぱり示されなかった。

もともと政治をあまり信用していない大阪の人々は「まあ、やりたいんなら、やりなはれ」という冷めたスタンスだったように思う。誘致の盛り上がりもなかったが、反対運動もさほどなかった。たぶん99%の大阪市民は落選すると確信していた：知らんけど(笑)

その通り、大阪は1回目の投票で最下位落選、開催は北京に決まった。ちなみに大阪は6票しか取れなかったが、落選後「大阪に入れたのに残念です」というメッセージが6か国以上から届いた(大笑)

◇ ◇ ◇

20年後の今頃、なぜ、こんなことを思い出したかという、
「コロナ禍による無観客開催」という異例づくめのオリンピックの開幕式が一週間後に迫っているのに、開催都市・東京では感染者が日に日に増す7月16日、こんなニュースがひっそり流れたからだ。

「井上信治万博相は、米韓が2025年大阪・関西万博への参加を正式表明したと発表。これで48カ国、5国際機関の参加が決まった」(産経新聞)

みんなが「東京オリンピック、どないなるん」と固唾を飲んでる最中、大阪と日本政府は着々とこんなことをやっていたのである。

大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」

(何のこっちゃん)をテーマに、2025年4月から184日間、舞洲と同じく長年「お荷物」状態の夢洲を会場に開かれる。万博をやるついでに夢洲を統合型リゾート(IR)、つまり「カジノの島」にしてしまおう、というのが落ち目の大阪あきんどの目論見である。

◇ ◇ ◇

この大阪・関西万博については、松井一郎大阪市長(当時府知事)の面白いインタビューが残っている。

「五輪招致で惨敗、やっぱり大阪は万博だ 松井知事が語る」(朝日新聞2018年11月19日付)

「1970年の大阪万博の時は小学生。親に何度か連れて行ってもらいました。初めて見るファストフードの店があった。子どもながらに食べたいなあと思ったけど、母親が作ってくれた弁当を食べました」。松井さん、「五輪がダメなら万博…」本当に正直者ですね(別にほめてはいない)。ところでこの内容、どこか似ていないだろうか。そう、先日の党首討論会の菅首相。

「57年前の東京オリンピック、高校生でしたけれども、鮮明に記憶しています。たとえば『東洋の魔女』。回転レシーブというのがありまして…」から始まり、マラソンのアベベや柔道のヘーシンクなど、野党からの質問には全く答えず思い出話を延々と語った、あれ。

私自身も、東京オリンピックでわが家に待望のテレビ7が来たし、中学の時あこがれの新幹線で大阪万博へ。札幌冬オリンピックピックではジャネット・リンに恋をした(笑)。甘く楽しかった思い出ばかりではある。しかし。

◇ ◇ ◇

企業もそうだが、トップが昔の成功例に酔い、「夢よもう一度」と語り始めたら、その組織はもう危ない。

東京五輪(1964年) 大阪万博(1970年) 札幌冬季五輪(1972年) ↓東京五輪(2021年) 大阪・関西万博(2025年) 札幌冬季五輪(2030年)

まんぼう(まん延防止)に「上り、下り」があるように成長期と衰退期、「上り五輪、下り五輪」「上り万博、下り万博」もあるのではないか。五輪開催都市の大半はその後、経済や治安が悪化。大阪が万博開催を争ったのは、ロシアのエカテリンブルグとアゼルバイジャンの首都バクー。国威発揚や石油成金の独裁国しか、もう手を挙げていない。そろそろ夢から醒めるころである。

「女」ころを哀れむように 荒れた都で虫が鳴く 見えぬ明日に希望をかけて 遠く尋ねる青い鳥(西城八十作詞、古賀政男作曲「夢よもういちど」)

「男の子らしさ」 「女の子らしさ」

そして「自分らしさ」

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

教員になって二度目の一学期が終わった。とりあえずの振り返りでもしておこうと思う。

去年の一学期と違うのは、私が担任になって最初の学期が終わったということだ。曲がりなりにも自分のクラスを持つわけだし、保護者や生徒とのやりとりも増える。学期末には、二者面談を終えた。毎日怒涛の情報量で、自分の力量のなさを突きつけられる日々だった。

「自由に自分らしくやればいいよ」と思っているけど、そのための手立てがなければ、それは教育者側の怠慢だろう。一方で、何もかもお膳立てしたところでうまくいくとは限らない。その匙加減を探し続ける仕事なのだと思う。

今の仕事をしていると不思議な感覚になるのは、ときどき過去の自分の声に耳を澄ませてしまうことだ。「あなたは どうして欲しかった？」とでもいうように自分が求めて

いた学校を考えてしまう。その度に目の前にいる子ども達は、当時の私とは全く別の存在と気付かされるのだが。

多感な思春期を女性だけの空間の中で生きてきた私にとって、特に思春期男子はいつでも新鮮に映る。一方で、今まで解けていなかったモヤモヤへの回答にもなった。なるほど、みんなこうやって成長してきたのね、と。女子校で過ごしていたときには、世の中の「お嬢様」なイメージと「陰湿」なイメージがなんとなくしっくりこなかったが、今なら少しわかるような気もする。女の子達はさっさと大人になってしまう。大人の会話の喋り方を真似たりしながら、振る舞いを身につけていく。ある意味かわいげがなかったな、私達。それと比べると、男の子達の精神的な成長はゆっくりに見える。

ただ、そんな風なラベル分けが本当に正しいのか。

曲がりなりにもジェンダー論を学んでいたたり、差別・偏見に関心を持っていたり、人をラベルで貼るのが苦手なはずの私が、「男子達は」「女子達は」と話してしまうことに違和感を持つのは当たり前のことだった。

子ども達は自然と成長しようとしていく中で、好ましい「男の子らしさ」「女の子らしさ」に迎合していく。周囲が意識的でなければ、いわゆる「有害な男らしさ」や「ガ

ラスの天井」を打ち破ることは夢のまた夢で、「○○らしさ」の枠の中で挑戦することしかできない。それは本来の「自分らしさ」なのか。

かつて、「男性脳」「女性脳」など生物学的な性差がそれぞれ性格や行動の嗜好に影響すると言われていた考え方は、改めて見直されてきている。女性は理数系が苦手と言われているが、家族の期待など、周囲の環境が数学のスコアに影響する一因にもなっているとの研究もある。ジェンダーやセクシャリティを固定的に捉える考え方からの変化が、「科学的」な検証結果も変化させていく。

ならば、私自身も固定的な見方から脱却する転換点に立っているのではないだろうか。

さる七月の週末、オンラインで「教育とジェンダー」についてディスカッションをするイベントを開催した。学期末の忙しい時期に大変なことを引き受けてしまった。規模は小さいものだったが、このとっつきにくいテーマで話してみたいという人が男女合わせて十名程集まった。教育におけるジェンダー不均衡についてみていきながら、最後には、現場で起きそうなケーススタディを行った。最終的に、「日常のテーマで考えられてよかった」「普段思っていた違和感を口にできた」などの参加者からの感想も上がった。

確かに、子どもを「男子」「女子」と無意識にフィルターを通して見てしまうことは、あまりにも日常的な風景なのかもしれない。

弁護士の太田啓子氏による『これからの男の子たちへ』（大月書店）では、男の子の子育てに奮闘する作者の違和感が語られている。男の子のいじわるは女子への好意の裏返しなのか、母親はいつまでも男の子を可愛いと思うのか、などの違和感と絡めて、性差別、性教育と言う社会問題が描かれる。子どもは知らず知らずのうちに、メディアや周りの大人を見て、固定的なジェンダー観を身につけていくからこそ、教育や情報提供を通して少しずつ社会をアップデートすることが必要だと太田氏は締め括る。

私たちは「自分らしさ」を求められるわりに、ますますそれがわからなくなっていく時代に立っている。そんな中で、生徒達に「自分らしく生きなさい」と囁くだけでは、暗闇の中にひとり立たせるだけで、振り返り、考える隙すら与えていない。少しでも「自分らしさ」を確かめられるように、言葉にできるように、手を差し伸べなければ、本当の意味で「自分らしく」することなどできないのだと、一人の「大人」として思う。

遠くに行きたい日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

自転車が多い。うちの前の道が特に多いのか、京都という町が自転車の多い町なのか、それとも日本人はみんな自転車で乗っているのか。正解はわからない。ここでしか店をやったことがないし、こんなに一日中家の前の道路を眺めているなんてことはこれまでの人生でなかったから。

夕方になると特に自転車がたくさん通り過ぎていく。そのほとんどが子どもを乗せる荷台のついた自転車で、母や父が一生懸命ペダルをこいでいる。後ろの荷台にひとり、前にひとり、さらに背中にもうひとりおんぶしていたりする。子どもたちは寝ていたり泣いていたり歌っていたりいろいろなのだが、ほとんどの子たちは首を傾け斜め上あたりにぼんやりと目を泳がせている。あの表情はなんというのだろう。ぼーっとしているという以外に言葉が見つから

ない。大人が無表情で歩いていたりするのはまた違った顔。味わいがある。自転車をこぐ親には見ることでできない顔。今なに考えてるん？と自転車を止めて聞いてみたのだがそんなことはできない。ぼーっとした顔をして通り過ぎていく子どもたちをただ眺めている。自分も同じような顔をしているのだと思う。今なに考えてたん？と聞かれると非常に困る。

近所の小学生姉弟が引越すという。アメリカに。遠いなあ。さみしくなるねえ。自分も何度か引越しをしたし、海を渡って引越したこともあった。海と言っても瀬戸内海だけ。学生の際は寮で暮らしていて、半年に一回部屋替えという名の引越しをしていた。その頃は小さな本棚とロッカーに入るだけの服、それから布団と炊飯器くらいしか荷物がなかったので引越しは数時間で終わる作業だった。だが引越し先の部屋には前の住人がいて、その住人の引越しが終わらないと入れない。その住人が引越す先にはまた別の住人がいる。二十人が同時に部屋を移るのだから大変な騒ぎになる。毎回必ずひとりは廊下に全部の荷物を出されて途方に暮れる奴が出てくる。段取りよく玉突き順序を考えて指示を出す奴も現れるのだが、そんな奴が現れるのは大体騒ぎが大きくなり混乱が起こっ

てからだ。半年に一回ギヤーギヤー言いながら、どうしてこんなに面倒くさいルールになってしまったのか、と思っていた。でも今になるとわかる気もする。ものぐさな男たちが四年間も同じ部屋で物を動かさずにいたらどうなるか。布団の下には間違はなくカビが生えるし、ベッドの下には何かわからないものがどンドン溜まっていくだろう。大掃除とかではなんともならない蓄積。いっぺん全部出して入れ替えたほうがいいに決まっている。

本屋で仕事を始めて最初にやったのは文庫の棚の並び替えだった。店長が「自分が思うように並べてみ」と言った。出版社ごとがいいのか、著者別にあいうえおで並べたらいいか。時代小説だけはわけたほうがよさそうだが、単行本を混ぜてしまうのも面白そうだ。棚の図面を手に本の背を眺めて立ち尽くす。なんの工夫もないと思っていた棚が結構計算されていたことに気づく。あーでもないこうでもないダメ出しされながら数週間。文庫はサイズがほとんど一緒だからありがたいね。あっちにやったりこっちにやったりできる。絵本や写真集だところはいかない。棚の高さを変えたり位置を考えたりしないといけない。文庫はいい。作業を終えると、「並びとかは別にどうでもいいねんけどな。自分でやったらどこになにかあるか覚えるやる」と店

長が言った。

店にタイヤがついてたら楽しいかも、と思う。柱の下にそれぞれコロがついてて、ストッパーを外すと動き出す。今日はこの空き地でやるかな、とか。ごろごろごろごろ。自動車の荷台に本棚を積んだクルマなら知っている。本棚が動く本屋さんもある。棚が生きてるのかと思うほど、いくたびに景色が変わっている店もある。それなら店が動いたっていいじゃない。ごろごろごろごろ引っ張って、今日はこんな景色。明日はどこに行こうか、とかやってみたい。この町の人は合わないな、とか、南向きはちよつと日差しがきつい、とか延々と言っていたい。と、そんなくだらないことを考えながら今日も昨日と同じ景色を眺めている。

「深い学び」をめぐる VII

松田 裕史

(高校教員)

六月に入って二回、広島の公立中学校に勤務されている胡子先生のオンライン研修を受けることにした。中学、高校の教員の中で今一番、研修を受けてみたい教員だ。(『生徒をアクティブ・ラーナーにする！ 英語で行う英語授業のルール&活動アイデア』、『中学英語 生徒がどんどん話せるようになる！ 即興スピーキング活動』など単著だけでなく共著も含めれば五指に余る著作があるスーパーティーチャーである。)

研修を受けることにした二回目の日は朝から驟雨が断続的に地面を湿らせていたが、梅雨の始まりだったのかも知れない。梅雨と言えば梅雨入りのことを栗花落とも書くらしい。栗に花があることは知らなかった。墓参りなど山に行くときに栗の木に遭遇するが、花の咲く時期に山に行くことがないのだろう。種田山頭火の「梅雨の月があつて白い花」という句の白い花は栗の花の事である。

研修は対面ではなかったがそれなりに得るものは多かつ

た。まず、授業を構成する軸が多様で多層的だった。活動が豊富な例はいくらでもあるが、軸を重層的に重ねている教師はかなり少ない。軸だけでも「主体的・対話的で深い学びの創造」「生徒が主体的に学ぶ教材研究」「指導法研究」「授業デザイン」「課題設定」の五つが紹介された。それぞれの軸はさらに細分化されている。例えば「課題設定」一つにしても「①既習の内容を発展的に活用する課題や分類ができる課題④SDGsを通し学びをリアルな社会に繋げる⑤言語スキルを伸ばす課題⑥自分事として捉えさせる課題」というポイントが提示されている。これらのポイントは胡子先生の中ではほぼ身体化されているが、他の教員がすぐにそうできるかどうかといえば難しいのではないだろうか。桃栗三年ではないが、自家薬籠中の物にするにはしばらく時間がかかる。

授業を構成する軸が重要なのは言うまでもないが、それに先立ち「生徒理解」が重要であるという至極真つ当なことを強調されていた。何かの研修でもよく聞くフレーズであるが、胡子先生が言われるからこそズシリと響いた。どんなに指導技術が卓越していても相手のことが分かかっていなければ効果は薄い。特に僕の場合、今年度は飛び込みで3年生を担当していることもあり生徒理解度がゼロの

状態で四月が始まった。しかも面談をしても、ある程度関係づくりができてからでないとい生徒は本音を吐露しない。

また、数値的な面を把握することは大事であるけれど、何をもって理解したと言えるのかという問も今更ながら頭をもたげくる。いや、理解したなどと言えたものではない。せいぜい理解度一パーセントを二パーセントにする程度のことしかできていないのだろう。ただ、その一パーセントの差にこそ違いを生み出す鍵があるのだとも思う。

また、五十分の授業が十分で終わるように感じられるから一日五コマの授業が合計で五十分になる、という感覚には唸らされる。僕は他の教員に比べ極度に時間を気にする方かもしれない。授業開始から十分くらいしか経っていないのに時計をしょっちゅう確認する。予定の活動が時間内に終わることにこだわる悪い癖があるためだ。だが、胡子先生の話を聞いてからやつと時間は無視することができるようになった。勢い余ってチャイム後も延長して続けたら生徒の表情が曇ってきたのでさすがに延長は止めた。それでもまだ四十五分を十分の短さで体感することはない。せいぜい十五分から二五分なのでまだまだ精進が足りないということなのだろう。

多彩な活動をつながりをもって次々と繰り出される先生だが、ヴィゴツキーやコルブなどの教育学がその背景にあ

ることも忘れてはならない。

研修を聞きながら、「読む」ことって何だろう?という問いの存在感がいや増しに大きくなってきた。即興的に「話す」ことや「書く」が重要視される昨今だが、だからこそ「読む」ことや「聞く」ことの価値があらためて自分の中では高まっている。『音信不通五七号』では奈良さんが「本をゆつくり読む人とあわただしく読む人がいる。イメージの喚起を楽しむ人はゆつくり読む。意識を断片化してひとつの理念へ収束させる人は読むのが速い。学び系の人人は結論を重視しないのにえきらない。思索系の人人は結論を急ぎつなかりを重視する。学び系のひとは悔恨をかかえる人かもしれない。」と書かれている。教育実践としての「読む」はどちらと言えれば結論を重視する思索系だろう。例えば、SDGs系の教育実践は基本的に思索系だ。エビデンスがあつて論理もクリアだが、いささかクリーン過ぎるのではないかとも思う。

自分の実践を振り返ると「学び」と「思索」のどちらからの極に振り切っている場合と、混合している場合があることに気づいた。そのあたりを整理し、「読む」ことにいざなう(発)問をいかに重ね合わせるかということを最近考えている。

わかちあいの声を感じるとは？

傘を貸すなら一緒に濡れて！

芝野 浩貴

(地球探究家)

何か積極的に発信したいなら、SNSを使えばよくて、賛同やらクレームを求めているわけではないので、静かに寄稿しているものの、何を書いてても大体無反応である。無職無所属の私は名刺がないので、名刺をいただいた人には必ず丁寧なメールで返礼をするのであるが、これまたほとんどの人はそのコメントに対しても無反応である。しかし、先日ある精神科医の方から「音信不通読みました。生徒さんの〈学び祭〉の声よかったです。私も参加したいです。」というメッセージをいただいた。那覇のオリブ山病院副院長の横田泉(みつる)さんからの丁寧なお言葉だった。横田さんとの出会いは音信不通58号でも勝手に引用させてもらったが、沖縄プロボノの途中、首里高校の近くの「おうちごはんe」に興味があつてお邪魔したことがきっかけだった。数学者である私が美しいと思うオイラー定数の「e」を「食も縁である」というコンセプトで店の名前にされており、横田さんのお勧めの本の「縁食論：藤原辰史著」を

「私も読んだことがありますよ」という話から本の話題になり会話が弾んだ。元司書なので「大体の本は読んでます」と大口を叩いた後、恥をかいたのだが、横田泉著の本を一冊も読んでなかったのだ。その後、『統合失調症の回復とはどういうことか』、『精神医療のゆらぎとひらめき』(いずれも日本評論社)を拝読させてもらった。

推薦人の一人の小説家の木村友祐氏が、横田さんとの出会いの経緯を、自分の書いた論考に応答してもらったことだと述べており、「やはりそうか」と思った。横田さんは2010年から島嶼巡回医療をされている。今号では、右記二書でなく、横田さんが編集されている『統合失調症のひらめき17号』を少し紹介したい。日本評論社は、私の愛読する『数学セミナー』を発行している出版社で、「統合失調症のひらめき」という文字は、いつも目にしてきたのだが、恥ずかしながら読んだことはなかった。「」は雑誌の発刊の志

「不治の病や一生入院といういわれなき烙印を押された時代から、法的整備と医療システムの構築が推進される時代が訪れて、精神医学の中心は、発達障害や気分障害、認知症などと拡散している。マニユアル主義、アルゴリズム主義、科学実証主義、市場主義が席卷する中、統合失調

症の眞の姿が社会の視覚に消え入ろうとしている。当事者や家族の語らいも等しく招き入れる新しい「ひろば」をここに拓こう。」

この志の教育版として私は「家族主義」・「部活主義」として必要以上にへべき論にあてはめたり、「スポーツ主義」・「ダンス主義」となり夢を餌に市場経済に子供達を巻き込んでいくことだと翻訳する。編集者の一人の高木俊介氏は論考「精神医療と暴力」の中で、温厚な横田さんの「患者さんの心は、おいしく食べること・味わうことを地道に繰り返して取り戻すことなのに、オムツ交換と食事を同時に行ってる看護師に憤りを覚えていた」という内容を引用して、精神医療活動のあり方に一石を投じられていた。ちなみに、高木氏は鳥取に住んでおられたこともあり、精神分裂から統合失調という言葉への転換を始められた人である。17号での横田泉さんの記事では、辺見庸の「月」を追いかけながら、「奪い合いの社会」になってしまったこと、〈優生思想〉のもとではわかちあいの喜びを味わうことはできないことを論じてあった。「自己表現と対話の中でお互いが変わりあう」という横田さんの治療の軸には、私も共鳴している。私事であるが、私は教員時代に一度も放送は使わなかった。たとえ生徒個人の案件であっても、

自分都合で呼び出すことには抵抗があったからで、私の方がフラフラ出向いた。というか職員室や教室の境界はもともとなかった。空き時間は用がなくても常に教室や廊下を彷徨った。横田さんとの往復書簡では、そのことをへ手ぶらの思想と言われていて、腑に落ちた。17号の巻末では横田さんは、写真家の鬼海弘雄の「世間の人」を紹介されていた。(2020年10月19日に亡くなられたそうでも私もお悔やみ申し上げます)鶴幸一郎氏「福祉は誰のために」司会の小林エリコさん「家族捨ててもいいですか」とつくりの東京ファンズの小林美穂子さん「コロナ禍の東京を駆ける」の対談も興味深い。オドリバの写真家久野充敬氏「シロウトですんません」、元アナウンサー塚本堅一氏「僕が違法薬物で逮捕された日を首になった話」、映画監督の大島新氏「ホセ・ムヒカの映画は私も勧めます」など寄稿者が多種多様で「わかちあいの声」を聴くことができる。漫画家中村ゆきさん「わが家の母はビョーキです」のイラストの傘の話は、前述のへ手ぶらの思想そのものではないかと思った。「傘を貸してくれるよりは、一緒に濡れて欲しい」この文が読まれる頃には、横田さんに会いに行ってるだろう。「相互変容・相互作用・気づき・ひらめき」についての時をわかちあうために。

八代日記 (十七)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

七月某日

新型コロナウイルスワクチン接種券というものが届いた。「ワクチンは十分に供給がありますので、あわてずにご予約ください。」と書いてあったのであわてずに数日放っておいた。

放っておいたのち社内でも、接種の予約受付が止まっているとの噂を聞いた。市のサイトを見ると「集団接種につきましては、十分なワクチン供給の見通しが立つまで、当分の間、実施を見合わせます。」とのこと。個別接種もしばらく再開しないらしい。グダグダじゃないか。

行政がグダグダになると、ナポリで行政とマフィアとのなんやかんやでゴミの収集が行われなくなったりというニュースを思い出してしまふ。行政サービスなんて奇跡的にかろうじて成立している危ういもんならうとは思いうし、高額納税者が公務員に対して偉そうにしてるのも不愉快だがわからんでもない。

しかしワクチンが打てないと、練習にも行けないのでも困る。もう半年以上メンバーとも会えていない。ワクチンを打ったからといって気軽に遠出できるわけでもないし、東京では感染がえらいことになっているのでできればワクチン打っても行きたくない。自分だけ熊本在住でメンバーにやきもきさせている引け目もあるので行かないといけないと思ってしまうつらい。けどやっぱりこんな趣味の話で東京行かせてくださいなんてとも言ってはいけないと思う。やっぱりしばらくは熊本を出られないだろう。

七月某日

新しいアルバムのジャケット案と歌詞がメールで届く。歌詞を読み込んでいたら、「良い」と「いい」、「様」と「よう」、「無い」と「ない」、「出る」と「でる」、スペースの半角と全角、などの表記の揺れが気になったのでリーダーに指摘した。

指摘したけれど、なんかいちいちこういうのを直すのもつまらないなと思ってしまった。ロックバンドの歌詞表記は揺れ揺れでもいいんじゃないだろうか。歌詞も載せてないレコードなんてたくさんあるし。いろんなことに説明的になりすぎるのも現代日本的な強迫観念な気もする。無駄なサービス精神と言うか。これがおもてなし…？

いやでもやっぱり詩として読める様にするならきちんと記述すべきか。自分自身が揺れ揺れのブレブレでいけない。指摘した分はリーダーがきっちり修正して戻してくれた。これで行こう。来月中にはプレス予定。

七月某日

今週は五日続けて熊本市内への配達があり、こんなことなら熊本市内に住んだままにして、配達後に直帰できるようにすれば良かったのではないかと思ってしまう。妻の仕事も市内だし要検討。

1日に4時間ずつくらい運転したが、最近は軽自動車のことが多いので(ハイゼットカーゴ)疲れてしまう。座りっぱなしかつ練習不足もあり体の衰えもひどい。いかんなどは思いつつ、何もできてはない。転職からのコロナで体重は少しずつ増えている。

早速物件探し。何だかどこも高いような…。いや確実に東京で住んでいた時の家より高い。当時は一人暮らしだったし間取りも全然違うからだろうけれど収入増えてないし。家族用の間取りで東京の物件を検索してみたら、こりや絶対払えないぜという値段。東京のメンバーはどうやって暮らしているのだ、と思ったが彼らのうち2人は一人暮らしであった。

七月某日

オリンピックが開会してしまったが、王位戦第3局と叡王戦第1局の方が気になる。王位戦第1局で敗れた藤井王位は第2局、第3局、そして叡王戦で勝って3連勝。苦手だった豊島竜王にぐいぐい迫っている。すごい。谷川浩司の『藤井聡太論 将棋の未来』（講談社+α新書、2021年）も面白かった。

将棋と言えば次男の髪が伸びていたので妻と一緒に風呂場で適当に切ってあげたら、佐藤天彦九段の前髪のようになってしまった。ついでに長男のも切ったら、たまの知久さんのようになってしまった。

ところで対局中に棋士が食べたものを紹介するカルチャーは何なのだろう。いつ頃から始まった習慣なんだろうか。

架空目録の愉悅

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

なんでも、最初に架空の本の目録を作ったのはラブレールだそうである。『ガルガンチュアとパンタグリユエル』第二之書に出てくる、サン・ヴィクトール修道院図書館の蔵書なるものがそれである。

『悦楽ノ女性ノ媚態ニ関スル巴里大学発令文』『脱糞法論』『司教用珍鈍喇叭』『宗門法判官蕃妾税』等々、淫靡妄曲破廉恥な書名が百四十冊ばかり列挙されており、どうやら多くは実在の書物を揶揄嘲弄したものらしいが、今日では大半が意味不明となつてしまつていて、如何にも惜しまれる。

現代文学の世界では、スタニスワフ・レムの〈架空の書評集〉である『完全な真空』が有名だ。『とどのつまりは何もなし』『逆黙示録』『誤謬としての文化』といった本をでつち上げ、真面目に論評した本である。性質上、内容にもかなり言及しているので、五パーセントくらいは実在

している、と言つていいのかもしれない。

漫画にも、個人の書齋や古本屋の店頭が描かれる際、悪戯好きの作者によつて出鱈目な題名の本が並ぶことがしばしばあるが、作中に架空の出版社の出版物が頻繁に登場し、とうとう漫画とは別に書誌解題本が出てしまつた稀有な例がある。

宮下あきらの『民明書房大全』である。『魁!男塾』で言及された(検証していないので全てかどうかは不明)本が百二十一点紹介されている。口絵には社屋の写真や、いくつかの書影が掲げられ、社主の半生記やインタビュー、社歌まで載つていて、ちよつとした出版社史の体。巻末には自社広告まで付ける徹底ぶり。年少の純真な読者は騙されるかも知れないが、それもまた良き哉、と開き直つた未必の故意的出版物。お遊びとしては、ここに極まる。

八十年代は、色々な意味で面白い時代だつたと思うが、当時、雑誌「エピステーマー」などで先端を走つていた朝日出版社が、〈週刊本〉というペーパーバックのシリーズものを出していた。最終的に、四十冊ばかりで休刊したが、その六冊目として刊行されたのが、坂本龍一の『本本堂未刊行図書目録』。

本本堂は坂本のプライヴェート・プレスで、実際に何点か出版しているが、この本に載つたものは今に至るも未刊である(ただし、他社で実現したものはある。中沢新一『森のバロック』、バルガス・リヨサ『世界終末戦争』などがそれである)。彼が出したいと思つた本の企画を、実際の装幀家にデザインさせている所がミソ。赤瀬川原平や安西水丸や沼田元氣や奥村靱正らが提示したデザイン画や実物のダミーは見ごたえがあり、並んだ書目(『糸井重里児童文学全集』、ジョン・ケージ『きのこ学大全集』、クロソフスキー『緊縛』等々)と共に実現を望みたいものばかりである。巻末には、各社文庫の解説目録そっくりに未刊行出版物の目録が掲載されている。

本本堂以上に、見せることに執着したのが、クラフト・エヴィング商会の『らくだこぶ書房・二十一世紀古書目録』である。

未来から届いた古書店目録というシチュエーションに基づいており、解説はこの著者(吉田篤弘と思われる)らしいファンタスティックなものだが、添えられた書影がまた凝りに凝つていて、オブジェとして素晴らしく、実際に手元に置きたくなるような魅力に溢れている。そのまま展覧会も開くことができそう(というより、実際に開催してい

る筈)である。

本文の組見本や、箱入本、背継本、和装本、豆本、手稿など、パターンもとりどりで見飽きない。

さらに徹底した本が、最近出た能登崇『ない本、あります』。クラフト・エヴィングの二番煎じみたいな題名(後記で「本歌取り」である旨断つている)だが、中身は同商会のオブジェ指向をより一層押し進め、文庫本だけに特化させた、一種のパロディ本である。

一枚の写真から想起されるシヨートシヨート風の物語に、その写真を使った文庫本の表紙と裏表紙の書影が添えられる。文庫の体裁が、既成の各社文庫を模して、本当にどこかに転がっていきそうな雰囲気である。

ハンガリーの著述家ラート・ヴェーグは喝破した。

「本好きという人種は、時に本そのものよりも目録に胸躍らせる。」(『書物の喜劇』)と。

いやいや、如何にも多胡にも真実まことに仰せのとおりでござりまする。

鳥取あれこれ その六十

内田 克彦

(地域研究家)

(承前)

鈴木徹三は、『鈴木茂三郎〈戦前編〉』の中で、次のとおり記述する。

しばしば夫人の言行に悩まされ続けてきた橋浦にとつても、おそらく苦々しいことであつたろう。橋浦は、一九三七年二月二日労農無産協議会を脱党し、実践運動から退いた。しかし、この事件が原因だったというのは、平林〔たい子〕の誤解であろう。

そして、「運動を遠ざかる理由」として、未刊の時期の「日記」を引用しながら、次のように書いている。

橋浦自身は、老年に備えること、犠牲になる気力が欠けはじめたこと、無産運動にバツコしている野心家と伍していくのが嫌なこと、勢力争いの渦のなかにいたくないことをあげ、「やるとすれば労農無産協議会の戦線で戦う事にするが、この派の独りよがりとは非大衆性は

かんともなし得ないと見透うしている」といかにも文人らしい心境を述べている（『橋浦日記』三六年六月一日）。

さて、甥の佐藤は、『橋浦時雄日記第一巻』の「解説 橋浦時雄のことども」の中で、ヒロについて次のように書いている。

ヒロは、一九〇二年に、新潟県西蒲原郡巻町の旧家の六女に生まれたが、父親が家産の一切を失ってしまい、一五歳で町の病院で看護婦の見習いをしていたとき、亡くなった姉の夫の後添えにさせられるのを嫌って無断で上京、「一度、日本橋の商家に嫁いだが、姑との折り合いが悪く、結局別れてしまい、その後大正十三年（1924）七月より時雄と暮らしていた。」

因みに、橋浦の初婚の妻りくについては、妹はると同じ「赤瀾会」に所属していたこともあってか、折井美耶子他編著『オーラル・ヒストリー 橋浦家の女性たち』の中では「橋浦りく小伝」と項立てして紹介しているが、一〇歳年下の後妻ヒロについては、同著では項立てせず、養子となった元子からの聞き取りを載せているのみである。

なお、元子は一九四三年に生まれ、実父が町会で時雄と付き合ひがあり、一五歳のときから時雄夫婦と共に暮らしていた。実際に養子となつたのは一九六九年に時雄が亡くなる寸前である。二〇〇五年に同著のために聞き取りを受け、その翌年には亡くなつてゐる。

元子は、同著で興味深いことを語つてゐる。

おじさん「時雄のこと」がずっと貴金属組合に勤めていましたから、共産党でありながら、贅沢なんですよね。「略」贅沢なところに勤めてゐるのは、あくまでも生活のためであつて、それにどっぷり漬かるわけじゃないし」というのがあつたみたい。

『日記』の編注では、『寒村自伝 上巻』から、

岩出〔金次郎〕君の片腕になつて『労働新聞』の発行にあつたのは、多年の同志で『時計と貴金属』東京支局の橋浦時雄君であつた

と引用したうえで、次のとおり記述してゐる。

予め時雄との関係の大筋を注解すると、上記二紙〔日本労働新聞〕と『時計と貴金属』の「こと」の創刊、発行を軌道に乗せて帰京した後も、時雄は岩出の事業の東京代表の形を一貫して緊密に連携し、とくに『時計と貴金属』が『日本宝飾時報』に題名変更（一九二二〔大十一年〕）して以降、四〇（昭十五）に至る通算二十六年間の永きを、相対的に独立した東京支局の経営（実質は広告取材）で生活費と運動資金を捻出した。

『大因伯』一九四八年九月号に、次の記事を見出した。

去年の春には、この時雄君の家にピストル強盗が何人かの組を組んで闖入し、その中の運の悪い一人は、急報で駆けつけた警官に射殺された。百万円の宝石強盗事件として都下の新聞は大きく書き立てた。無産者の立場において、世の権威に抗する運動をつづけて来た時雄君が、ピストルをつきつけられて金や宝石などを奪われるようになった世の中。

橋浦時雄のよく知られてゐる前半生のみではなく、後半生も興味深いため、いつか「日記」の続きを読みたい。

（この項、了）

二〇二二・七・二四

最期から二番めの……名曲と向き合うためにII

秦卓 梅林

(楽人)

「悲愴交響曲」がチャイコフスキー最期の作品で遺言ともなった経緯は愛好家なら誰もが知っている余りに有名な逸話だけれど……では其の一つ前は？となるかとさて……ポピュラーでは無い作品なのでは？……いやいや

I

第五交響曲？「白鳥の湖」……ブブルーである。誰もが意外なその解答は？

——バレエ「胡桃割り人形」！

此の、聖夜を彩るとっておきのメルヒェンは、舞台音楽を長年手がけた彼のプロ作家として熟練の洗練された手腕が存分に発揮された事、亦新たな表現の手法として「チェレスタ」と言う楽器が初めて理想的とも言える程効果的に使用され、キラキラ輝く存在感を發揮、實に此の作品一つを以て「スタンダード化」された事も相まって大ブレイク。

II

然し、筆者は以下の点が遺憾無く發揮され、胡桃割り……は今日に至る迄、時を超え場を越えて世界中に愛される古典と成り得たのではないかと確信してゐる。其れは……？

シューマン、アンデルセン、メーテルランク、賢治や南吉、手塚治虫にも通じる美質であるが①此れら大人のプロ作家が子どもに向けて、彼らを唯悦ばせよう！と秘術の限りを尽くし……かつて子どもだった彼らが子どもの頃の夢やファンタジーを棄て去ることなく②子どもも目、耳、心そのままに「不思議の扉を開いて」純粹なポエジーに託した結晶だと言う事、つまり決して上から目線で大人が子どもに押し付けたものではない……と言う点で卓越した傑作となり得たのだ。

III

「胡桃割り人形」は、子どもを主人公に、現実から夢、幻想の世界に入り込んでゆく童話で、現実世界と異次元の世界とが、物語と音楽の流れの中で交錯する所に特徴があり、観客や聴衆を視覚的聴覚的に魅了する二つの舞台の抽象的異化を可能にし、人々の想像力に直接働きかける。子どもが何に感動し、ワクワクドキドキしたのか！大抵の大人の作家が喪った場所にこそ冒険世界への扉が有って、此処を通ってチャイコフスキーは夢と現実を行き来する……

真のメルヒェン世界はこの鍵を持たない、木偶の坊を決して「味方」とは認識しないので扉を開けない計りか、中を一瞥さえさせない。多くの「能力に長けた大人」がメルヒェン世界の幻想に拒絶されるのはこの故にだ。

IV

更に、バレエから離れ、管弦楽の為の組曲版も作られた事で(バレエ)劇場の文化の無い地や舞踏に関心の薄い層にも、純粹なオーケストラのレパートリーとしてこの作品は自ら雄弁、劇的に語りかける！ ようになった：

物語世界への導入である序曲、語り部役の(渋い)ヴィオラは、8分音符で語りかけるように訥々述懐を始めるのだが、二部に分けられた其の片方はズンズン先を急ぐ：一方下声部は反芻するかの如く主題のバス進行を少しずつ変奏し乍ら、一寸遅れてついてくる：両者の絶妙な歩みは実に対照的。下声部の慎重な歩みが急展開の物語に躊躇して居た「良識ある」大人のリスナーの意識をもしっかりと捉え、ランタンで其の足元を照し乍ら最後尾から追って来る：全ては老練な作家の思ひが儘：

聴てトラムペットや打楽器のお囃子が賑やかに加わり華やかな宴、お話はいよいよ佳境に：

もはや物語の虚構を疑う者は誰も居ない：後にハリ

ウッドやデイズニーも做らうようになる鮮やかなエンターテイメントの技法沓え渡るまさに独壇場！

此の心躍るメルヒェンが最晩年の作品である事を鑑みると、作家の立ち位置、そして個性がより鮮明に感ぜられる。

2021. 07. 01

今回の一枚

P. チャイコフスキー「胡桃割り人形」作品71 (1891~92) バレエ全幕(台本 E. ヲホフマンの童話を小デュマの仏語訳により M. I. プティパ)

① A. プレヴィン指揮ロンドン交響楽団(録音1972年5月ロンドン)

② V. フドセイエフ指揮モスクワ国営放送交響管弦楽団、ヴェスナ児童合唱団(録音1986)



(イラスト・秦阜梅林)

コロナ掌編小説

古賀 啓三 (米国ミシガン州隠棲)

先日、大学時代の友人夫妻がシカゴから遊びに来てくれた。

年二回、感謝祭に我々夫婦がシカゴを訪れ、春、イースターあたりで彼等がミシガンに来て二日間ほど共に過ごすことが習慣になっていたが、それがコロナで途絶し、恐らく実際に会ったのは二年振りくらいだったと思う。

実際に、と但し書きしたのはズーム呑み会を何度か催し、顔を見る、という行為だけでフィルタリングするなら逆に例年より多かつたかもしれないから。

この現象は、パンデミックで人と会えない、という飢餓感から、割と多くの人々が体験していることかもしれない。

コロナ、アメリカではCovid（コーヴィッド）が一般的な呼称だが、が収束し、と云い切つて良いのか否か知らないが、ミシガン州では州人口一千万の六割方ワクチン接種が行き渡り、日々の新感染者数も百五十人ほどで推移してらしいので、かつての一日一万人などという数字に比べれば「収束」と表現しても間違いないように思う。

友人夫婦がコロナ後初旅行の行き先として我が家を選んでくれたことは大変嬉しかった。

あなたは、君は、わたしに取つてとても大事な人です、という顕示は多くの言葉を弄するより、こういうジェスチャーが最も有効なんだな、と感じた。

友人との交友は恐らく四十年にやらんとしているのではないかと思うが、文字通り「気の置けない」友人であり、しかしそこにお互いの伴侶や家族が介在すると、微妙に「気の置ける」状況が発生したりもするのだが、ま、大方良好な関係が続いている。

好み（食べ物、読書、旅先）、属する社会経済層、といった要素が近似していることが「気の置けない」最大の理由だと思う。

今回は二回夕食を共にしたが、二日目は我々の行きつけの鮭屋に行くことにした。

ミシガン州では恐らく最もオーセンティックな鮭屋で、以前にも連れて行つたことはあり、旨いけど、ちよつと高過ぎる、ということとその後には敬遠していたのだが、今回は疫病の厄払いだ、どんと来い、というよくわからない理由で再訪することとなった。

「写楽」は旨いのだが、ちよつと遠いのが玉に瑕。

ま、法外に近く高い、など他にも瑕疵はあるのだが、車で三十分ほどの道のりの暇潰しに、皆で短い小説をコラボしよう、という僕の提案に対する残りの人々の反応は「Lukewarm」(あまり乗り気のしない)なものであったが、僕は気にせず、まず鮎を食へに行くのだから、これは鮎屋で「Take Place」(発生する)する物語にしよう、と云った。

板前のカズは、アメリカに来た際は留学生で、鮎職人になるなどとは全く思ってなかつたんだ。しかし、生活しなければならぬので鮎屋でアルバイトを始め、仕事にかまけて絵を描く時間がない、というよくある悪循環で結局アーティストの夢は諦める。

幸運にも手ほどきしてくれた板前が日本で修行した職人で、筋の良さもありカズはメキメキと腕を上げていった。

鮎の技術に長けてくると、調理と美術は共通点が多いことに気がつく。

最初の店は美大のあるシカゴであったが、その後三軒店を移り、今はミシガン州のデトロイト近郊の店で働いており、歳も三十を超え、成り行き任せの人生を自蔑している。

左手の親指の先がないのよ、自傷なの、と友人の細君、ベティ。

常連のウエインという男に仕事にあまり満足してないんじゃないか、と指摘され、何とか驚きが表情に出ないよう努

めて、ウエインの職業を問うと、サイコセラピストだという。マジカル・リアリズムのツイストも欲しいわね、というベティに対する「捌いてる途中の魚が生き返るんだ」という僕の回答は少し受けた。

「写楽」に着き、カウンターに友人ボブ、家内、ベティ、僕と並んで、家内とボブはシャルドネ、僕とベティはビールで乾杯する。

このオーナー・シエラ鈴木さんは僕と家内の好みを熟知していて、全てお任せである。

ウエインは典型的なアメリカ人風にカリフォルニア・ロールなどの巻物を主に注文するのだが、カズが今日はわたしに任せてくださいませんか、と申し出るんだ、と僕が云うと、一瞬まだ続けるのか、という表情を見せ、直ぐに気を取り直して、握りの旨さと、カズの選ぶネタの取り合わせの妙に感心するんだけど、それを口には出さない、カズが自分の鬱屈を言い当てられた驚きを押し隠したように、とボブが合わせてくれる。

こういうところも友人関係を長続きさせる秘訣だ。

鈴木さんが、ニヤニヤしながら我々の共作に耳を傾けつつ、手は忙しく動かしながらも、自分も何か云いたそうな顔をしている。

プールとかちわり

あきの素生

(くうねるめがね)



七月初め、小学校の側を通ったときのこと。歩道のすぐ横にあるプールから、子どもたちの歓声と水音が聞こえてきた。プールの深さ分+α、地面からかさ上げされた高さにはプールサイドが位置していて、その様子は見えない。でも、すでに日は高く、夏らしい気温の中をのろのろと歩いていたのが、一瞬にして、自分も水しぶきを浴びたかのように涼やかな気持ちになった。と同時に、なつかしさがこみ上げてきて、思わず頬がゆるんだ。

プールの時間が好きだった。先日聞いた歓声に、当時も今も変わらないのだなあと感じたが、細かく思い返していけば、プールに入る前から子どもたちは叫んでいた。全国的な取り組みなのか通っていた小学校特有のものなのかは定かでないが、事故を防ぐために、二人ひと組で「バディ」を作るといふきまりがあった。あるリズムで笛が鳴らされ

ると、どんなタイミングであろうともバディは手をつなぎ、バディ、と言いながらその手を二人で振り上げて振り下げ、その勢いのままにしゃがみ込む、といったものだ。その練習を、準備体操の前だけ後だけにグラウンドで行う。バディがいなければ、事故に遭っている可能性がある。先生たちの真剣な様子に、「ここでふざける子どもはおらず、「バディ！」と声を限りに叫んでいた。

シャワーを浴びるとき、消毒液に腰まで浸かるときも、その冷たさに叫んでいた。何度か叫んで、やっとプールサイドにたどり着く。

六月くらいから始まるプールの授業、初期は水温が大抵低い。きやあきやあ言いながらプールに足を入れ、身を沈める。水から上がれば、唇を青くして、プールサイドを吹き抜ける風に身を震わせる。その分、体がなじんだ水中や、授業後、片側にゴムの入ったプール用のタオル（頭からかぶるとるてる坊主になるあれ）をまとったときに感じる暖かさは心地よかった。教室に戻った後も一日続く、じわりと体を包む疲れすら、プールの時間が好きな理由のひとつだった。

小学校に上がった頃、水泳を習い始めた。ピアノと水泳どっちがいいか、と聞かれて水泳を選んだらしい。当

時の自分が何を考えていたのか全く覚えていない。ピアノが弾けたらいいのにな、と思うことが度々あったし、今でも思う。が、泳ぐことは大好きになった。

顔をつけるところから、ひざを抱えて水中で浮き、蹴伸びをし、ビート板を持ってバタ足。だんだん級が進んでいて、クロールなどの泳法を覚えていく。少しずつ泳げる距離が伸びていき、それぞれの泳法で長めの距離を泳ぐテストが始まる。苦手な泳法のテストの前は、途中で息継ぎができなくなるのではないかと不安で、一分くらい息が止められたら息継ぎできなくても泳げるんじゃないかと思いつき、懸命に息を止める練習をした。半分沈みかけながらも何とか息継ぎすることができ、息止めの練習は幸いにも無駄になったのだが。

練習の後の楽しみは、アイスを買うことだった。スイミングスクールには、アイスの自販機とアイスケースが置いてあり、泳いだ後の、塩素のおいさをまとったふわふわした頭で、好きなものをひとつ選ぶ。夏によく買っていたのは、「アイスの実」、「サクレレモン」、そして「アイスボックス」。「アイスボックス」は、コップ型の容器に入ったグレープフルーツ味のかちわり氷だ。ぺりっとフタをはがして、ジュースを飲むように氷を口に入れ、ガリガリとかみ砕く。あっさりした味と、練習で内にこもった熱を冷

ましてくれる冷たさ、片手でぎゅっと食べられる格好よさに、学年が上がるにつれて、「アイスボックス」を選ぶことが多くなった。家でも学校でもない場所で、少しだけ大人っぽくなれたような気がした。

中学校にも高校にも水泳部はなかったが、スポーツセンターに行つて泳ぐようになり、それは大人になつても当然続いた。

水の中で蹴伸びすると、体が解放されたように感じる。耳に届くのは自分が水を割つて進む音だけ。あの、水と自分、みたいな、閉じられた場所で、自由になつていたのだと思う。



イラスト あきの素生

我八石コロ



ドラメリア

(座敷わらし)

わたしは石ころなのだ。

哲学ではなく「猫にとつてのわたし」の話。三毛のあんずにとつて、わたしはよくて自動給餌器、いやどうも道端の石と認識されているようだとい前に書いた。それでも十分だ、だってかわいいのだから。半ば悟りの境地でそう思つて来た。

ところが、その認識が間違いだつたことがわたしの合宿後に判明した。突然自宅と仲間から引き離されてハンストを決行した彼女は、預け先では猛獣化して誰も触れられなかったという。付けられたあだ名は「とらこ」だつた。模様ではなく荒ぶるタイガーだ。それが、再会してわたしの顔を認めるとたちまち内気な三毛猫に戻り、顔をこすりつけて甘えてきたのだ。自分は石か電柱だと思つてきたが、一応特別な何かに認定されているのだなあと思うと感慨深いものがあった。これは嬉しい誤算だつた。

一方で非情な事実も発覚した。では、そのあんずについて年長の相方チャイがどう捉えているのか。結論から言う「眼中にない」が正しいようだ。突然の仲間の不在につ

いて、チャイは寂しげな素振りを微塵も見せなかつたのだ。普段と同じようにわたしに甘え、よく食べ、よく眠つた。十年同じ家で暮らす相方など、最初からいなかつたかのよう。実家の老猫は年若い猫が事故で亡くなつたとき、数日間家中を探し回つたそう。こちらは元々不仲だからそこまではいかずとも、何かしら反応を見せるのではないかと…… そう思つていたのに、まさか何も変わらないとは。もしや、最初から仲間とは思われていなかったのか。そうか、あんず。おまえも石ころだつたのか。元石ころとして不憫でならない。

なお、わたしが特別な存在だつたのはわずか三日間のことで、現在はまた石ころに戻っている。



・編集後記……

コロナでしばらく開催されていない土曜夜市。子どもの頃は「どよよ」（どろろみたいな）だと思つていました。わくわくしてどよめく、そんなイメージ。ドラメリア(編集長)

大雨だつたり猛暑だつたり、表に出たくなる日がつつき、往来は静か。人の気配が遠のくにつれ、「中世」へと関心が向かいます。重力と恩寵。奈良敏行(発行人)